

朝

■金丸 栴一

妊婦がたおれる

産声にならない声がのこる

そしてそれが最後だ

砲声が熄み

あさがきつかりあかるくなる

かのじよは両眼をひらいたままだ

なぜかって そんなにはやい死に方があるの
だ

静寂はきなくさく

木にみどりの一葉もなく

めざめるのはその土地の名ばかりだ

ひどくみじかいできごとであつた

夜がしらみはじめると同時に

砲声はおこつた

そしてそれがすべてであつた

硝煙がただよいそれだけ夜明けがおくれた

(個人詩集より)

第五章

労働現場から

WOOLWORTH

働く、それは食うためである。しかし食うための苦役としてののみ労働があるかといえそうではない。働くということは、多くの不満や恥辱や憤怒や倦怠をともないながら、なお簡単には表現しにくい充足を人間にもたらす。

その微妙なりアリティを、この章の作者たちは実感でとらえようとしている。素朴な^{つよ}勁さが詩にあり、生活にある。

ふりかえったら うんざりした

■山野 治

1

おい はたいたらいかん スパークさせるな スパークしたら爆発だぞ
にらんだ顔つきでオペレーターが早口に云った

馬鹿野郎 ドカンとなったら こっちのいのちがおしまいや

T-701 8000KL 貯蔵槽のエチレンを船積させる P-701ポンプ

こいつが故障を起した

故障部点検だ

ぶ厚く付着した保冷材を もぎとるようにくずし はがす
凍りついているのだ

保冷がなにしろマイナス百四十度のエチレンだ
裸になったパイプの表面が 今度はじわじわ霜をつけはじめた

おい 爆発もこわいが 手袋を脱ぐなよ エチレンかぶったら忽ち凍傷だぞ

2

おい 取外していいぞ パージ終ったと云ってたからな スパナは^Bだ
ちよっとおかしい オイルが出たぞ

水とはちがうか

ゆるんだフランジ部から陽炎立ってゆらいでいる

安全ヘルトせにやいかん 墜落しても銭もらえんぞ 落ちるなよ

火 使ってええのか

OKだ

定修工事下請業者その又下請四日市工業の配管工が火花を散らしてアーク溶接をはしめた

北西の風 防火シートを外れ火花が落ちてくる

すごい人数の蜘蛛の子が散り 脇見知らず 作業を分担 うごいている

馬鹿野郎 俺たち殺すんか どいつが監督や出てこい

取外したフランジの配管内部から猛然と火がねじれて吹き上げている

狂った赤い炎の明るさの下で 顔面から胸にかけ 火傷した同僚を抱きかかえ

眉毛と睫毛を焼焦した顔の男が大声でわめいている

3

けむって暗い冬がたの気圧が移動してしまおうと 雪を着けた鈴鹿連山が銀嶺となつて 海を見下すよう
に 天にせり上がってつらなる

おお寒い

風がまともに吹くからな

一九七一年一月〇日

作業員二人死ぬ

昨日午前十一時十分頃 山八運輸機工の下請の鈴木組専職 霞浦夫34才 一志郡嬉野町 香月達男28
才 福岡県直方市門前町 霞さん香月さん二人は 新大協和石油化学建設現場で グレン車を使って
高さ40米の塔の踊場を取付作業中 吊上げていた踊場が片向き 乗っていた二人が墜落 全身を強く
打撲即死した

ほら あそこの塔や 緑の安全旗が吹かれているやろ
あの塔かね

4

伊勢湾臨海工業地帯この膨大な資本に寄り添うようにカーブし 高架し 沈むように下り 名四国道が

はしる

林立する赤白だんだらの煙突

霜天へ積乱雲の湯気を上げている再冷水塔

火の舌を吐き出すフレアスタック

夜景がまたすごい 照明の海だ

一つ一つのあかりが 闇に片目をつぶした怪物を飼っているのだ
まだまだ欲の野心を 海を埋め立ててひろげてくる

○

一面に生えひろがった芦をなぎ倒し

杭を打込み

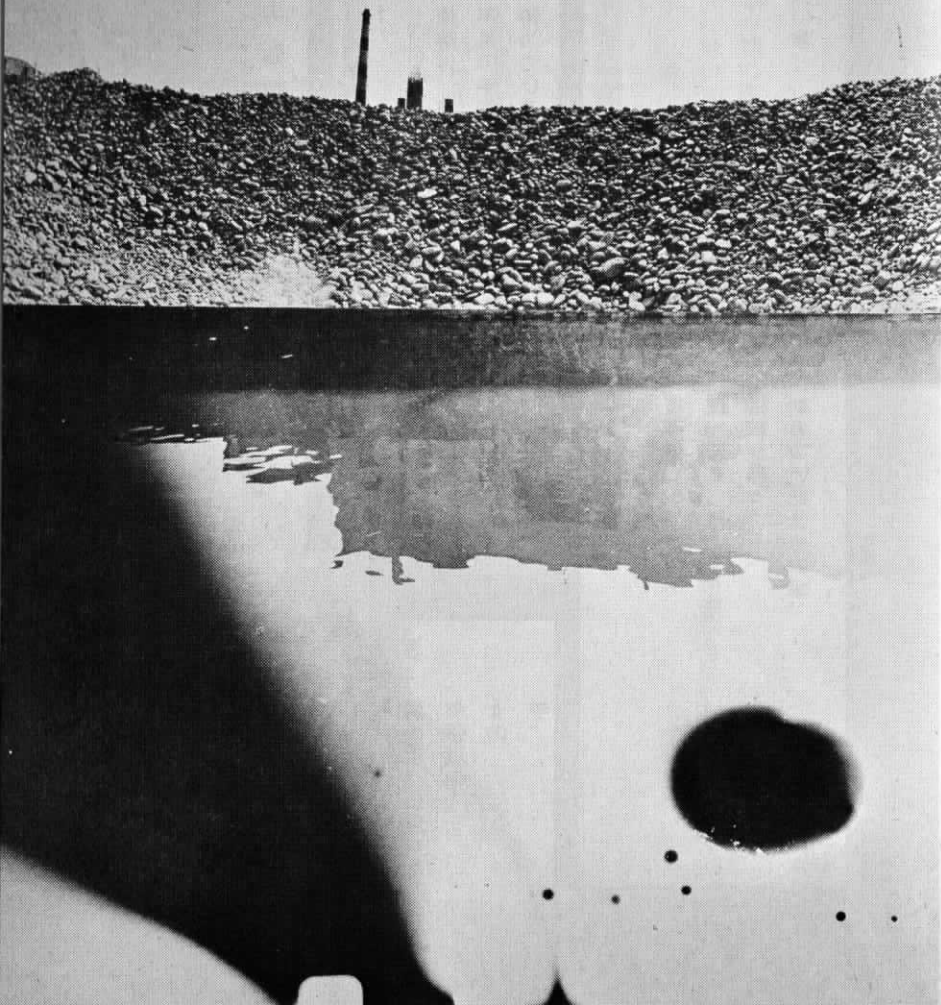
ちっぽけなエチレンプラントを

芦原の中に建てた

あれから十年余

やつらの蓄積する資本は計り知れぬ

（筆者は農民、農閑期に工場に
通勤する労働者でもある）



掌

皮革工の

■村上 弘一

2

毎日、ゴム手袋をはいて
皮を掴んでいるので
ヒビやアカギレはしないが
先の方が太くなった指。

掌

1

俺等は、皮革を作る
不具の手を
持っている。

3

男のように堅くなった
皮張りの
女の
手。

4

黒い革の日は、黒
赤い革の日は、赤
白い革の日は、白
塗料がついたままの掌。

5

皮革油とシブが沁み
洗っても、洗っても落ちず
指紋が黒々
刻みついたままの掌。

6

皮を、何百枚も切り回して
いると、カサカサに乾いて
すつかり、革になった掌。

昭四〇・四・四

(筆者は当時、K皮革労組委員長)

7

利き腕の人差指に、タコが固まり
コブのような筋肉に
ひょうたんになった腕。

8

このこの指は
もう、皮革しか掴めない。

9

この腕は
もう
皮革しか作らない。

10

この掌が
皮革工、十五年、
の
苦笑いをする。

いつか――

あと幾年
この不具の手さえも
クビになる。

終

紡績工場周辺

■きど よしみ

〔I〕

工場の正門の前

大きな雑貨店があつて

タバコ・パン・インスタントラーメン

シュミーズ・パンティまで

売っている。

この紡績の娘たちに限り

掛け売りしてくれるから

まことに便利で

娘たちは

日があ 一日 いれかわり立ちかわり

店先にむらがつている。

ひとつきならいい

ふたつきまでは許しておく

みつき 経ったら

支払いをのこした娘は

丸裸で店先にぶら下げられる。

長い紙に

「全く長い紙さえ必要なきが本当にあるんだ！」

名前と 売り掛け代金の

一覧表がはり出され

「右の方々は 支払いがすむまでは

掛け売りはいたしません」

村に通ずる道路沿いの店前に

娘たちは

丸裸でぶら下げられる。

〔II〕

小さな カメラ店なのだ

入口から狭い階段が

二階にのびている水間街頭沿いの

小さな カメラ店なのだ

頭だけは

いやに。ヘコヘコとさげる

中年のおやじは

いつも店の奥で 花札をいじっている

相手している男のジャンパーには

その工場のマークが入っている

紡績の娘たちは

ここへD・P・Eをもちこむ。

市価の半額なのだ

会社の厚生福利という仕掛け

娘たちのすべてが

印画紙にやきつけられて

おやじとジャンパー男のチェックをうける

俺たちがその写真の中で

娘たちとうつつていたとしよう

サークルだとか 詩だとかいってるヤツは

見のがされるはずはない

娘は荷造りさせられる。

月賦の安カメラ

賃貸しカメラが

娘たちの休日を見視する

紡績の厚生福利費！

社長がやってくる

■岡本 栄

死んでいる

今日の工場は死の町だ

道路にやちり一つ落ちてない

「当日は脇見せずに また雑談をしないように」とのお

達し

労働者の連帯は仕事中の雑談のうちにめばえる

なのに、ただだまって働くこと 上司の云うとおりだ

まって働くことが 労働者の美德となっている

会社にとって労働者の生きがい 個人の喜びなんぞ関

係ないんだ

労働者はひとりひとりどんな人間でもいい

ケガで一人が休めば別のひとりをやとい入れるだけさ

しかし 近頃の生きがいブーム それも資本がさかん

にがりたてるこの生きがいブームはどうしたこと

か

資本さまの方針転換?

とんでもない

別のひとりが簡単に手に入らないわけさ

「男の職場 ××重工」

「生きがいのある職場 ××重工」

言葉のひとり歩きさ

「安全○○○万時間達成!!」

そうさ その後二人も死んでるのさ

「いや、あれは下請工さ」

「私達の会社は生きがいのある職場です」

同じ口から出るのさ こんな言葉が

生きがいのある職場の これが実態さ

生きがいも安売りされたもんだ

ないんだ 全くそんなものないんだ

ないからわざわざ声高に「生きがい 生きがい」と叫

ぶのさ

うそはくりかえせばくりかえすほど その効果がある

と言ったのはどここのえらいさんだったか

死んでいる

今日の工場は圧殺の町だ

あのいつもの落書はどこへ行った

労働者の心の表現 唯一の休息場トイレ

トイレの落書は跡形もない

△△△△したい

医学書より具体的と思われる女の図

ヘタなヌード写真よりもっと勃起する交接の図

時には横にうめき声まで添えてある

俺はきのうやった——の体験談から○○○の何番へT

ELしろ——と

わざわざ電話番号まで書いてあるあっせんまで

働く者の心の叫び

生きがい 会社のいう生きがいとは

これらの叫びを圧殺した所にあるのさ

死んでいる

今日の工場は絵本のように白々しい

道路の掘りおこした後もすっかりきれいに舗装されて

いる

階段の鉄鏝はライトブルーに早変わり

工場は我々の生活の場

ケンカがあり 怒りがあり

友情があり 愛があり

おいら人間さまがいるのさ

おいらのいない工場は

絵にはなっても何も作らない

運河を渡ると

■小西 誠

運河を渡ると

大時計が見える

運河を渡ると

空間を切断する

工場の音が響いてくる

そのために

つぎはぎの空が

色つき始める

運河の

河幅いっぱいに

丸太がきしんでいる

黒い年輪の隙間から

水面が光る

油ぎった水面を

汽船が上ってくる

運河を渡る

後ずさりは許されない

魂が工場の中に入っていく

今日も

労働者は運河を渡る

あのたうれハスの風景を眺めて
重い心を運んでいる

運河を渡ると

製粉工場のサイロ

製鉄工場の煙突

浜の方に

造船所のクレーン群

などなどが黒く見える

ひととき

白い高層ビル

屋上の大時計から

時を支配する

サイレンが響いてくる

車と人の吐息

朝霞の空を占拠する

白いビル

黒い工場

太い神経のようなクレーン

運河を渡ると

工場地帯の

重い気流が漂ってくる

運河の上を

今朝も渡る

労働者が渡る

汽車で運ばれて

道具のように詰って

この運河を渡ると

この運河を渡る車のきしみを聞くと

人の心に歯車が回り始める

じわりと肝がすわってくる

うなる帯鋸。

ひかる回転歯。

それは

思い出を消す非情のひびき
燃えつきるまえのあがき。

けずりとられていく木のはしから

青酸っぱい香りが肌にしみ

思わず

さし入れた木から離す手に

木の粉^ガの返り血をあびる。

「ヒューン」

「キキッ」

声にならない叫びは

わたしのさけび

乾ききった身の叫び。

身をひきさいた熱い木^キの粉^ガは

わたしの血。

どくどくとさかまく血を

立風書房

九折

木材工場〔5〕

■向井 清子

作業衣に押しつゝみ

ふきあげる木^キの粉^ガに身をあらう。

無心に切りきざんでいく

冷たい回転歯。

丸い木から生まれた四角な柱は

明日へのわたし。

うなる帯鋸。

ひかる回転歯。

一本の木をかんてとぐろを巻く

その歯

とげとげと鋭く

うなり

いかり

はげしく回る。

赤く燃える一株のつつじ

夕映えに。

■井上 弥寿夫

生

とうふを売りながら

空をながめていた

つばめが低くとんできて

目の前をかすめていった

私は

はずかしいと思った

こどもたちが手をふっているの

黙って手をふってやった

私は

またはずかしくなった

うつむいて

村を通りすぎようとした

ふとだれかが呼んでいると思った

垣根のかけに

ひっそりと待っていた

缶の中をのそくと

とうふの上に雲がうつっていた

胴割れ

■杉谷 昭人

善意の倒錯なのだ
他人の稲が重たく見えはじめると
平等は観念に変化する

胴割れ それは
実りすぎた稲のことだ
どうにもならない豊かさなのだ
怠けてばかりいる土百姓の
消極的な洞察の意志だ

しかし日が沈んでからも
稲架は耐えつづけねばならない
支えるものは重さだったのか
それとも憎しみだったのか
もう自分には分らないままなので

日の沈まないうちに

稲架を立ててしまわねばならない

胴割れ それが

熟れすぎた知識は

たったひとつの混迷の意志だと

いつも形をうしなってしまうので

斜田の畦で納得している

影だけでも収穫せねばならない

実りすぎたぼくの沈黙は

胴割れ それは隣りの田んぼから
畦の高さを一畝だけ越えてくる

いずれ誰かが刈ってくれる

△連作「わが町」より▽

…と、思ったわな

■佐藤 攻

たった十五分のさ 出勤猶予時間にさ

「大幅賃上げ」のリボンを

胸につけたのさ

上がるのは物価ばかりで これじゃ子供もつくれないとな

第一 結婚もできないとな

男の子も女の子もみんな

リボンを着けたわさ
そうしたらさ

猶予時間イコール出勤簿整理時間で
勤務時間中の組合活動だとな

職務専念義務違反だとな

裁判所の中立性と品位を汚すとな

当局が大声あげて違法呼ばわりしたわさ
そうしてさ はずせのはずさないのともめたわさ

言うことは大幅なんてかっこいいけどさ
ほんとはささやか過ぎてかっこ悪くてさ

小さなリボンつけた位じゃ胸も張れないわさ
だから若い連中は

みんなさ

大幅賃上げってボディ・ペインティング書いて

ついでに裁判所のマークも入れて

街中ねり歩いたらさ

腹の虫おさまるって思ったわさ



ところで おれはだな

新米で 太っちょの管理職さなんだわな

組合はな 職制は敵だというけれど

末端職制なんてなんにも偉くはないんだわな

それにな 管理職連中だつて

「大きな声しや言えないけれど こればかりは最高裁が悪い」

本当はそう思っているんだわな

それというのも 最高裁判所が実状無視の通達出したもんで

下級裁判所当局が「お前たち職制は命令に従って組合とつちめてこい」つて言うけどな

法律学者や若い裁判官たちは言うんだわな

ありやだめだ

第一むちゃだ

憲法違反だつてな

だがねえ おれにだって可愛い子供や妻がいるわけよ

それに おれ一人力んでみたつて どもならんしさ

本当はおれだつて迷ってしまう

それに

「十五分だけだまつて頭を下げてろ そうすりゃ台風はさっさと通り過ぎて行つちやうさ」つてさ

先輩たちはこともなげに言うんだわさ

それにさ

「お前が造反したら 第一おれたち職制仲間が迷惑するてはないか」つて言うんだわさ

だがな ここが思案のしどころだ

と 思つたわな

サンドイッチのつぶし餡になるのはおれの性に合わん

と思つたわな

何もかも承知で 部下たちを処分する悪に加担はできぬ

と 真実思つたわな

それにな 蝙蝠のまねして自分をごまかしてみたつて あとで後悔するのは目に見えている

と 思つたわな

だから 誇り高いおれは かつきり決心したわな

言うべきことは大声あげて言つてやろつてな

どうせ巻き添えくわすならこつちにしようつてな

え そじゃないか

だから ええくそつとばかり命令は一切拒否といったわな

そしたらな

なんのことはない「あいつはノイローゼだから放つておけ」つてな

みんなが寄ってたかって てっち上げたわな

「これがあいつのために一番いい方法だ」
なんてさ

しかしさ こいつは明らかに眉つばだあね
そじゃないか

え そじゃないか な な な

一番都合よいのはほんのところ誰なんだ



死体焼却夫への

恋歌の

第六章